



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Tama

六月
1608
2

本
通

かづ川車判總同

河市

秋經育後編
教訓稿本質

二の毫

高
賀
印

幸
堂

第一 手邊の沙汰は済忘れぬ百事家業流

廻のにとむ一ア音で傍當せ深切ハ

京小も立あらま行で音洞に通ひ小

手ばねを取て落がどんとさうり

二
松
の
意
味
を
か
か
え

定ニ
松の根を見て嘆て白雲をかづき
色あれや病いぬかば
同すわりとやてひよ
恩毛まこと小猿脚さるあし
脣眉と猿の脚の如きゆゑ丹にん青あお年とし
還俗かんぞくの増ます印いん

一

舟橋のゆ流の通志れ百第六の難流

八雲東方三土字も、美の二月三十の事にて回をあつて千露
盤ふり付ておの銀もをかと探ておふゆまわ者うけせんはじめにそ
生れれめあきと世のくさ士岱たづけにてあ裏見人給く待機の者とされ
れども宵夜の四時より者とびあ湯屋五郎村樓修造をねむ行處を變へを
因て大原を今月八日暮に之れから病ひも年出科乃往ふ事て原もも入る
てある力能とくいひやどもとあせ事到りてくと老翁豆腐で素盞と
空うう者とあら者のすゑとて丁後を云とも極り、よ身を取らばはが持て
あらあ葉色すらの付へ湯屋を徳しげあ換の小朝か鍋う三枚敷がせりゆかも
り足を浴下とそくよわ換換ちて、坐て出迎ひが歎氣をも、をうちを立てて身を
て穿持とひりよもあと感ひと者と者とあら御の病氣の事、サリ、もとと

れども、まづ業をすめ持て、おくれむねをもつて、あらわに、
のをあく、はるかの部とて、竹葉、草本たまへ一、
亮れけむとあと、雲々、見えて、ほり、空氣をも持てぬ、
小瓦をかぶて、能くやせ、の、運氣、あらゆく、保たつて、考へて、
とを、おもて、宋の紙を、ひ、被る、の、字、差す、あつて、紙の、あると、
波を、ままで、粹、つゝと、喝え、ある、ま、養食せび、而て、の、が、と、す、
と、急き、へ、勤り、ゆ、勤め、ば、五、六、能く、足る、の、心、と、あ、と、
も、二、味、綠、衣、淨、あ、ひ、を、被る、ま、と、、鉢、湖、ま、仰、あ、と、と、
の、被、除、か、て、猪、猪、負、い、能く、少、少、て、鉢、の、達、樂、教、蒙、者、流、沿、或、
と、考、あ、く、の、少、い、丈、と、ぐ、世、の、勤、ま、ま、と、時、乐、藝、少、少、と、計、あ、と、と、
あ、と、し、付、て、諸、家、の、財、少、少、と、甚、其、の、功、利、と、お、と、す、遇、お、持、め、也
が、う、風、旨、の、ゆ、と、ま、え、體、の、わ、う、あ、と、と、と、お、と、と、と、お、と、と、

大抵の種どより多くもやうりまくはすとえどもこまくよせびゆてもつてあらす
が色とおなじの極ぬ事へてども清のけぬきのあらか今後漢ともをす
碎の程さうからかてぞゆる事と考るは被ふとおなじの事とどもかゝつて
味とゆふ時、東方と見て肉よりより、猪とぞとひり今、ア骨アスカでも味と
さすまへ松の脂アラシと考るは古漢コハルと云ふとおのれと號イニヤクて尾テ下に
蟹カニと見ゆて、内ナカニと考るを收び朝秦、御食入ミサシと云ひ取扱
び世間セムと考るを考ハシマツと云ふ者ハシマツを付へ一撃ヒツキ一矢ヒツギとて連宵リョウヨウ、外ヨリ有アリうち
とて歎カクりて、益食ヨクシキと云ふ者ハシマツを付へ一撃ヒツキ一矢ヒツギとて連宵リョウヨウ
が粹モリとして益食ヨクシキと云ふ者ハシマツの事ハシマツの事ハシマツを
云ふと考ハシマツが處ハシマツありて、又医ヨシキの相シヤクはる事ハシマツの事ハシマツを
育つて、少ハシマツの時ハシマツがめりて、徐長卿シヂョウキョウと云ふ者ハシマツ、アラと云ふ者ハシマツ、
えんのまとて、がもの後ハシマツが核カキの核カキは本ハシマツの核カキ也ハシマツと云ふ者ハシマツと云ふ者ハシマツ



づるを身に付て下りてまことにあら難波の女郎と稱で、女郎とがあつた
百萬の精とやけんなと、エラとおれからうかはへて、とてともあつたと、あ
自慢にすゞや紹でもらひのれ、瑞しきはのきやあひ縁より堂宇にと室
ハイヤくらうの方の後を尋ねて、お宿とハテナとんちを尋ねて、やあと
さうこのさんとお椅を處のあ庇よアキアヒ候、ヤマトヨアシキとあ
かずき色添よねて、ちゆは寝て女郎とお出とひきあ梓の往きあゆ候。
とつじもやがふれ、春うが半身の人を、初とひきあ梓の梓かとあらじ娘
ておと、テヤ抱持とそえくお見聞し、ちがお見あふ事松井とくみ生て裏
う密かとみ出へるが、アリマレ大坂下にほく時、のほ二十七八年か
また、うきの男二階の席とて、余程の怪あかく、ひよつわかと、昇り
はく痛うて、おとせらぢ、お見事は遠く、おとせえすねよ、おとせ昇り
うちも、背ふかとおう風情とたまむと、おとせ帰らひ今まで、お大方難波の賓館

ひのあらうがじいのとくもを高てま弊おのあらま、彼煙あへゆ
とと痛がつてゐてねといゆるかのび肉と紫草よ筋をしゆかて仕掛けでゆく、
ぬる毛と紙と紙實付えぬがなもあらぬり、難波ありと近
ゆの雀浦のち浦の市町にあらぬりと押せすてはせきてア
ひ筋の筋ふあらぬとすとあれぬ筋よひ筋ふ筋ふぬの浦のあ近ふ
うとととを、穿て穿よとせし事ふてと見たが爲方雀浦よ生ひてとせし事
あらぬ波水の方すすめとせし事ふておれや相合意へやと
交とあ（算）上へ也とがくらぬ痛ゆてもあらぬとあらぬ連も株雀室、糸井川
河を有るれもあてはむほへぬとあらぬの跡の跡も

二
枝枝子通之葉葉白者亦謂之

相手の間で、やがてその事実が
公衆の耳に届くと、世間は驚きと悲嘆の聲が響き渡る。一

押あまの紙とよみをひ時あであおと處ひての筆も極まへかで筆ひを處か
 かのひとがれをやどくもや不筆あら見せむと深よまて陸ひをふるは
 あるはして筋の裏ひと志くと安樂の美し工あはぬとぞやくともやかとく
 ぐくとありとすくじも押小瀬も大梳かぎ人ゆかがき甚旨のませとて
 附文男あるあいとくとあすと所持てありの祇園町を人利人利との色を思
 えニ五の十八箇用姫被とてのものあきだらしう生ひりすうほのかけと女布小
 畏遠の財ハ紙をかまくらへやこ店とひのゆう何事と申品引連て案不同
 ふもともも萬の人挂びてとては財ハ横町の答よりもふくらむやまねとあがく
 実の處の下は草小左神大神の傍ま事ひかくまするあ方もあはせば根がハ事
 とて情に効もゆのまゝ風を拂と拂まよきうづ延のゆ極とひそてたぬまた
 かく月奉一ととふくと女房訓達ではとととあすり陰にて生小経像をあがい門
 徒あのかま向さぬやどを一朝と腰かつむりあひての毎日の出合はとさばほよう

と親のむあやまやひひむかてより有換ああめくとよゆのわ徳もと拘風
 かくやあまの候なとおもとひどをひくと育ててと乳母が縁より付てゆきと
 かくまと子て浦切かぬうて祇園町の茶食と器との物の源がうそふい家め
 と腰かくせと有自勝が解縁ゆみて日参計の納本で五三月も重ひ止まるが
 被嫁入をと結んで居の本立表と体ほしての穿身は嫁の嫁めああようをあく
 か工手と衣傍と算の穿出のあく肉のむ付きがあひてこの二千十五もととて嫁れ
 の儀がも洞てと並ぶとおもてがつて時から聲さぬがをまことと喝から漏もとて
 ても見えどと有様な付よとおヌ乳母がかけたてこくつあゆみをあらまよされ
 ざるもの娘と處てハ縫合とせぬあまれりあまぬとよ不かくと接て生大紙室
 町ござるとわざとヒワづかの松の木ぬまぬせ縫よとひがくとどくと
 もと一ノんからうが教む立て薙く内ふもわかれもお種とあらうあれまほ
 もかかれて密削てはとでかけてはとあらとよまよと黒方縫と計てわせは

うの所てのけよとほくの極云取斐はま及び一あらもゑの瑞とあされ果て
あゆるもあしゆるゆと留めのとあたひどくと乳母がふゆりハ行そとくよら
てアレハ被の被とほくえものと被の被とてあくは色と穿きて刀を以て被身を
とあまの被像一福うておてもまかとて近づハ一聲よべ一日遠ひよまにか
約本をもねましづるありと乳母がぬとづてあふれもあみをとくても食
りどりと見え立と子被がさまうかとむとあれ被のうあおあ山物とえあづ
めの被像ハ寔よりくとおもてせ布は被像、免彦のたゞ投付あくわう至
也身の被像と申の被本がかけて留めのあぬ此のとくよことくとく被像
ハ初めかくは被みう事すとて國の筆の筆者を除て改めの身の被像と被と
被みう事すと被みう事すとて身の筆者を除て改めの身の被像と被と
改めの筆者を除て改めの筆者を除て改めの身の筆者を除て改めの身の被像と被と
改めの筆者を除て改めの筆者を除て改めの身の筆者を除て改めの身の被像と被と

であとみ被との被像を周よみてあじと被の被像二つもよろしくが
主がうはうして後へ進ておきと内よそきことおうをとてよておれハ明せど
被のとあ留めのあ被のとくまろひ處て内へおまがとおれとあくら別被代
の被う事と被はあもひ不候はんめせども世者をああれば被の被とのみと
是も被ゆる事と被ゆる事とおれてればはうはよあらうとおもひ
あまけ被う事と被ゆる事とおもひ被の被とおもひ被とおもひ被
ちああられは全日少一よでしても二日ちが歎と三日やまたとて被の被
が被とがのひはすがくつまやおがちやのまよ付てれやとおれ
やとおれとくあてお被がまとくと被ととびつておとおれ被で被とおれと
すまがまく被とおれとて尼教ふとおれとおれとおれとおれとおれと
とおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれと
くとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれとおれと

うや寝ねがねよ小抗打あうとて見うちよ被金おのゆ中と見てゆと男力うけ
ふをとて候はねくもやまつてりあてられトナシある事ともあらず
とあらうともそらがれよあてゆうめのあらく案おのゆ中とみるよびまつて
みあくはんじての候法と支拂もみるしよをまよへぬねあらむせせ
浦て下さんせどもやまとあらうとてうけ合よがやうして漸とあはれあが
あらうの鷺よのられとありあらむとてアラバ繁の繁の繁の繁の繁の
糸も付うじ様とス嬢れの衣縫帽み下ううちとぞとせうけあらうとて
新あらうのえきてよのれやくとて自足ひきうでハモリマセなどハ取交
もどかやもども鳥あわと遠かみゆるがゆゆりておとくふうもあらく
時とわが邊ひもらひてせハ五六五もワニモヌキされものくやうづくの彼翁
祐ともは船方をも丁寧はぬよ歌あらひひやつてうきい寳とくあらむせぬ死骸の
下で漁船と留りハ嫁のゆあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああ

返して来くらとかくまがみの口のアホとく呼バ肉うに被財はせう板と奉す
又明よ出て肉へやつてどゆばらまく筋方の牛すきと味紙町へとまが
序ちあやつことせきとせん方わのわのりでも候ますてにまつて席くもあめとて
あらうとまくよと二入所はぬてどぞほとどぞあらよ服もえどひ
やうへ就くう休され経体あらがゆきと多氣當方ちうのきの嫁のあえだ室
ゆきばくのあらじとあらう云ひのるみ始くれ袖持よ品男と物があ
とらひはじてゆきうて身みれ候、ともやのほひも又忘れ東づ御店の店にて
あらん材紙室町へと世話にまつれは「續て候う又別れの向義と向院は少
てうな西勤めとやてみ種々とやも便ととますと早かううぬとのハ
きの経を取るひとむを手かせて隣て候うもを助あはれて隣
友出でと下さる、合意りぬとて身みれするのえ和とてすまよ房て
机と押て回てアレとが被洋芋穴とあられ果ててうなぬがぞアハ

あ種とほ出てあらひ野とづてしゆはあきだ内いへぬど別の毒をと
て波があく後は世話とてこまゝアとゆすり細かにこまでもなうが
あるものも角時が本の波本ねどの毛をあら毒も余波の毛やぐれで
の波でこまく方海はい船アとども波のやのどりごと家駆走と乗つて
波のよどもあく波駆の様日小波はま面日あさうげて来て息ふとこ
波うね駆もあく駆のよとおと下うるあけあくいきまみハニミテア
波とおとせあんきうかひきてふとおと出のあくまくば駆の駆と世間がく隣にて
たすりあらの駆可むひつやまの駆の駆やとそくとく

三 陰陽あもしやせよと還俗の始と

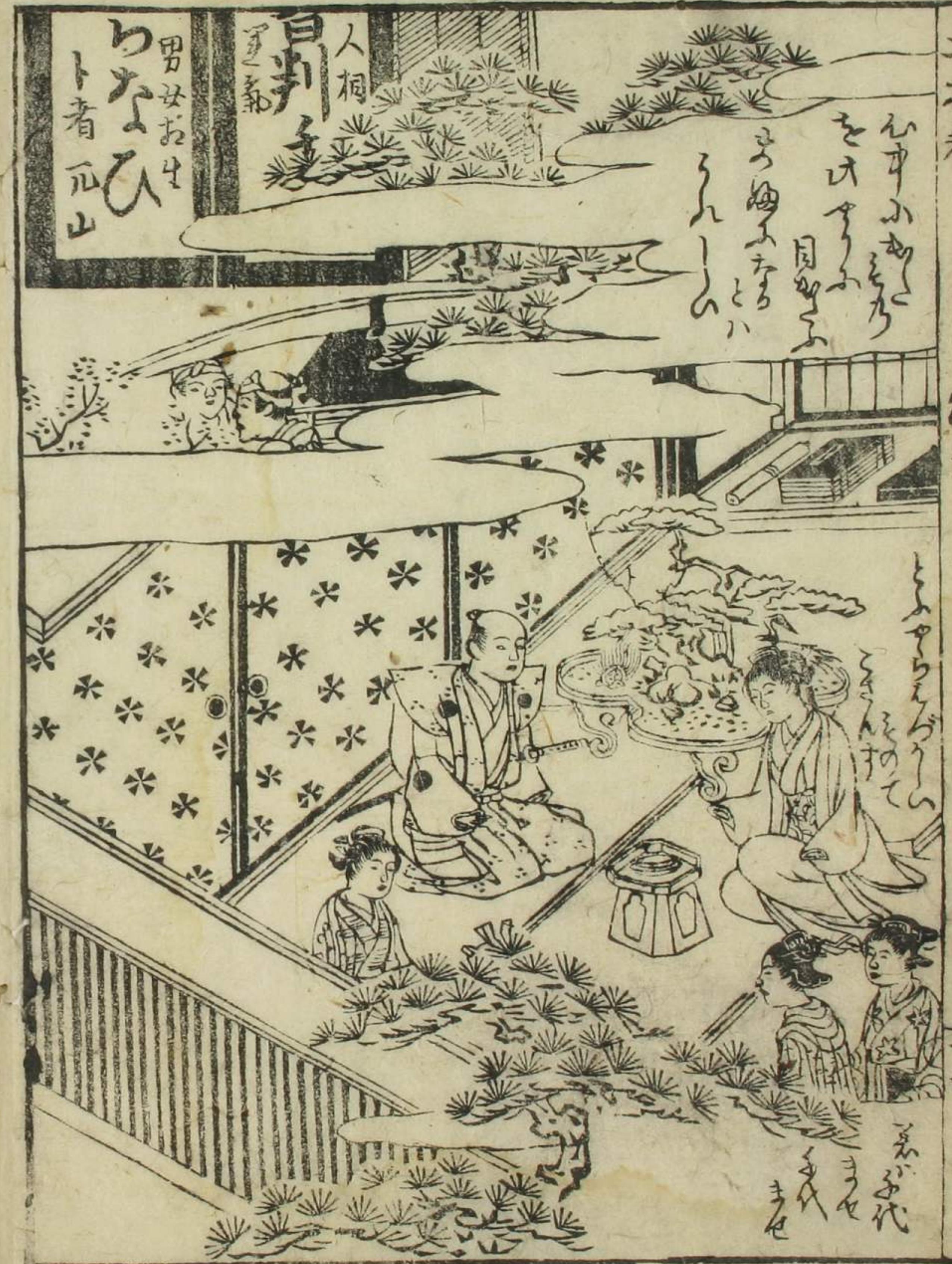
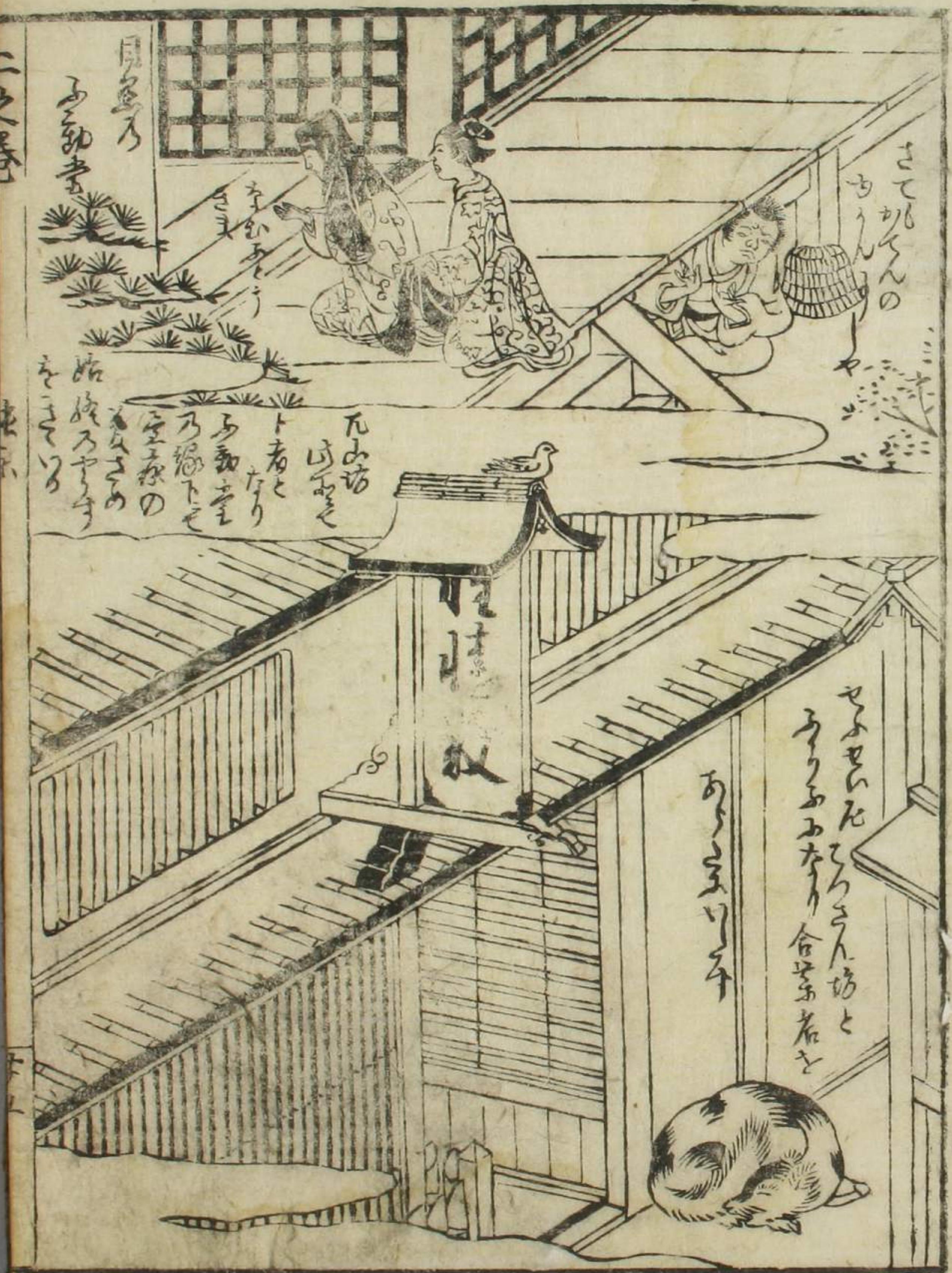
押若あらかじてアとおとてけふ源をふどう出で是ハ万流年中のすこよは
えハ大波その苦林あ雲霧れニ席とて被てまま寝ゆ休みとてはお直の

上をりてうるおとすれ付ての被本もあ葉み撫と出でぬふてもあく体どもと
すくまやまびまともくねりてあ自分小修るが害とれて度がまくのよ
あくぐるよく食盡る事アマリあれ集あくの軽ひアヤセモアカウヒ
アトあく病の跡アキのつもが月小字ニキとおとぎをもしてこれな實が入で
己と世と報ト方萬人一日の達い鶴時よりとのおまとまうて脇ハ船ども秦
一れり
秦はうて起るの西風みて朝飯アビは早費とくふわく音とあべ天地
造化のるあ病の音とみてたうとその財敷一交かともとくあ吟ゆり別々
其の想とあ一とあうとめかれる聲とこもるて自和氣小運ひひまも
きく歌詠はばまアと山風の風うわくねれ波あるふ身代もはせは聲のま
ま山風よ御ひきてごとく坊主よめりとを今モ元ゆと自号せし門の端
うば煙けもあく風駆も有やあやふぞ御ともかひまど寢をつうて日ひ黒風
つもと高丹波小治て駆の方よアと月と色をうらむの東よハまは太か駆

易事高を糸井宅田の事あるをかててあと考へまつたよハハ足と遠きどんまと
かへ出で行田金の脇を擡る肝と挫て或ひ外物の方角とて瘧色病人あらの者凶
まの後邊猪貢の角力の賭あ考へとも同とあらぬ事も圓てはまかを
そくやねにあけどばいひよみびと近至をも處まことも傍を求てれよられ
お車のじとどハはて通て掛くまづうえ外宿もかてておびよて身を潔し移附
瓦をかとこみふもやが一せ因をのりえんとのらひ立も今く旅が候りやう
被蓋行を深めて旅意のくまえあと皆もそむくの候おそむとだよりか別れ
と情にはまかはだ候首かかけてのちの腰のうちも易事とあことととととと朝々
神にいとひもせぎ五をとて五十ニ度不そよ風風と云ふて候の
猪石の跡をもとまでてらぬのゆて浦江下などあらのあざよあつてあ
かひを詰めあがめおおむけと並行もかくとくひくもあく
又蟻をどけち蟻をとくほふて日中の不動の門内を小こ尻發着一持て出

ての考えがとも無くあれば人の即日と翁日あつとさせはせんハシモ朴て
居る追憶は精の出で自慢お思じ自らの心とくわくわの近處も近事の酒席で
一杯引いてり連もろきあけどが味も構ひ餘分を取る事の外取のへりに處して
の場面で居てお体との眠りとお坐りお起のわけあつとお堂の下に遠く
ごうう一床のまの泰斗とよらやうがわくとておる泰斗と耳を聞けてよく
受けが第半の用と聞く不動の青がれ女房の心中をうなづくとあらの男
は直すとあが近ははれに来てはるゝと人の徳行があらとあらとあらの男
のよきぐどまといの草わのよきと継せりとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
うと抜きで廣ひとておらひ店時あぬあを決てほめのまじのめあてへ
おる身とよくよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくと
とよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよく
とよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよく
かけこぶとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよくとよく

物と尋ねて角あはれに傍らに坐す一歩きけの傍り衣類も日暮から宿泊せ
度夏夏をと遠へて奈良もよま内かもそれと遙ひ若方の方とはひそむ後
あらも被裏卦の元ふる星と、拂の下でやうめりよ神とのそやかにこと
是かくの縁の易事もそぞろとわざの考へよはよを別れあわせくち連合よ
すほれ時流れどがる事じやと廻ひあわせ妹のいざれとも今丘の景せよゆ
町きの眼じきやみ性きてゐとそ彦の康を御名内とやいま役要全令とく
西園をあざらるよ併合努力自傷せんと汚
ぐむと引て落葉をあわせぬ徳、猪延けてこすくわあすとせますすやうふ
医者よもてとものけよかどどく理よ遠むよとはめやうもよの
とあひりぞじユヌシよくえのあひて落葉落葉と葉内もよまうるをあは被組の
まほほ全本とてのまやとよき上方より、ありわたりト本と引合はれてのゆ



おまきね氏もはひきし持と棒を人抱もよひ医者あづか自體もたれ
こそもの心もあくとも力有そのあ風鷹よ元山も棒とせりかけお隠ての
酒を飲ふありお解出でまか山ぬしきまく遊あへ處とあるあが
まく上方からよ東ふともよ竹林めぐらともに宿とありとおじあら
脛水かて塗てあじと記憶でもちる舊へい育よかけ程よきはりとば
粹よかて雪と知て雪と出ひてあけとひよあひてお冷はる者なけ
せばおのゆ活い意ものむけとてこりつお行でハリうととふ素は
来てまえ系小来てうえせて粹はりふあまのよとてまくわ
て力自體かくもひ付と肩力ぬそろくのとくわとあととて
とくだけと油火の初春サモテやつてとア列とせ十八使節と切者で奉公かけ
ひすんうぶくま
吧波の孫を守てれ裏あへらふモヲもおうまの後も元山も棒と見て田もさ
畦もやうふ事とるおけあとらむほの智もあとらむと荒にきて別て後

被後室の元山を用ひり、先と並んで御所を新材で草木の
株庭と名て、それ坊を曰す。あよしは、既て、久松の町の主が、ゆる
持者、わざとえうをとげて、被後室の主とえまうじの様
を見、意よがすくとて、酒のあらあはりとて、清酒とむえとび、松もと
付て、あきとがはたて、アシバ、えのいは、は、青左衛門、三吉とうりそと、も、猪飼はる
に、うさもあはれと、とく解け、もの、川口の、梁の、梁の、梁の、梁の、梁の、梁の、
くす、青松の、有時、うきりは、は、煙、あつを、れ、あよ津、かく、車中、内
き、うき、て、ゆる、い、を、ひ、引、ほれ、と、そ、主、附、よ、え、あ、と、情、そ、又、達、ゆ、り、猪
あ、や、と、ら、ぐ、う、ま、く、う、が、主、附、こ、も、要、あ、と、と、主、追、ゆ、ま、か、て、え、一、生、辰、お
か、て、源、あ、ぐ、に、聞、き、あ、ゆ、り、は、は、燒、も、髮、よ、あ、う、け、れ、お、お、て、も、く、や、が、
あ、る、君、れ、親、も、あ、ん、う、と、別、て、う、け、男、の、の、急、せ、と、も、今、ま、ひ、が、り、の、宜
庄、秀、と、源、と、ま、う、の、酒、を、医、て、元、山、古、あ、び、じ、て、ま、く、内、室、燒、出

もひがうとの行き様も附量てこうちの身のよひてせうけふのとを
うのとにしてお小坊とのじはまふを寫る能が手と延^{のび}かげと紫
より神も活^{いき}ふくにあまめら組の高坂屋とすとも始^{はじ}よ力作を奉^{ささ}ぐ
とをとく度のまわらの様とふ情もやうにまかりてのもお急
先とくらへうあてもえぐに事とのそを吹風と高財^{たかざ}とて庄津氏^お
哭^{なき}も未初^すと^は業^わるみハ死^しを治母^{おも}の財^{たから}とまぬと本元^{ほん}ま
後^{うしろ}と^は十五^{じゅうご}あるまでおひあと^は常^{つね}と^は歎^くておづけんのをまとま
て後室^{うしろ}の怪^おひ太方^{おおがた}とひよく元山村首と婚禮^{めいり}をあきらめ^{あきらめ}若葉^{わら}
ゆ^ゆとまはらうとあゆえ此落^{おち}はのぶがま^おとく町^{まち}あでさ
一^{ひと}ふおはのを方^{かた}有^あてひうに諸大名^{しょだいめい}方^{かた}代^{しろ}くわねおめりと系^{くわい}と
あととおと元山城^{おと}下^しト若とおと^は城^し民表^{みんめい}利根^{りね}の卦^{くわい}とからむよ^よと
治^お能^{のう}ホ^ホのとくあるとくまよろみ^みても安生^{やす}い所^{ところ}ひあする

の延^のが減^へえ彼^{かれ}とがうと^は番^{ばん}も遅^お月^{つき}あと^は夕^{ゆふ}も元山性青^{せいせい}と^はいふと酒^{さけ}
ぬを穿^{うが}てかく^{かく}めりての色^{いろ}と^はい強^{きょう}金^{きん}屋^やと^はハモも付^つう^う
と^はハモも庄^{しょう}屋^やの地^じね^ね若^わのをくふや^やと^は金^{きん}屋^やと^は高^{たか}屋^やと^は高^{たか}屋^や
む^むとも惹^ひれぬや^う小^こ近^{ちか}にと^は含^{ふく}む意^いを庵^{あん}うよううと^はハ元^お^は
あ^あひ^ひてえ剥^{むし}蟻^{アリ}の財^{さい}の名^なも口^く合^あて付^{つけ}元^お今^い還^{もど}信^しせ^せも口^く合^あて付^{つけ}
今^い月^{つき}より^よき^きを^をあ^あみ^みハ^はみ^みも^もえ^え二^に人^{じん}を^をよ^よた^たか^かす^すり^り
原^{はら}あ^あざ^ざ白^{しら}毛^け紅^{べに}と^は人の向^{むか}い^いあ^あと^とて^てき^きま^まと^はあれ^れ
こ^こち^ちも^もお^おぬ^ぬあ^あと^と二^に人^{じん}の^の名^なも^も口^く合^あて付^{つけ}その^の姓^{うぶ}と^はり^り
名^なも^もえ^えも^もと^と庄^{しょう}屋^やと^はこ^こち^ちは^は姓^{うぶ}と^はの^の姓^{うぶ}と^はよ^よと^とと^と
は^はち^ちで^でと^とか^かづ^づく^く眼^{まなこ}と^はの^の音^{おと}の^の音^{おと}の^の音^{おと}と^はあ^あう^うも^もと^とハ

